



昭和42年 六甲山系豪雨災害

～体験者インタビュー集～

市ヶ原で発生した大規模崩壊(神戸市中央区市ヶ原)

国土交通省近畿地方整備局 六甲砂防事務所

インタビュー集について

平成29年(2017年)7月、高度成長期にあった六甲山麓の暮らしを土砂災害・洪水が襲った「昭和42年(1967年)六甲山系豪雨災害」から50年目の節目を迎えました。

この災害は、六甲山麓においては、「昭和13年(1938年)阪神大水害」、「平成7年(1996年)阪神・淡路大震災」と並び、被害の甚大さとともに、以降の災害対策にも大きな影響を与えた「決して忘れてはならない災害」のひとつであります。

土砂災害の減災に携わる関係機関は、「昭和42年六甲山系豪雨災害50年行事实行委員会」を組織し、平成29年7月を中心に、この災害の脅威や教訓を改めて認識していただくため、各種の取組を進めてまいりました。

国土交通省近畿地方整備局六甲砂防事務所においても、平成28年度よりこの災害を経験された方々から貴重なお話を伺うインタビューを開始し、ご提供いただいたお話や当時の写真などをとりまとめて映像化を図るとともに、製作した映像を活用したテレビ特別番組の放映、講演会の開催などを行ってきました。

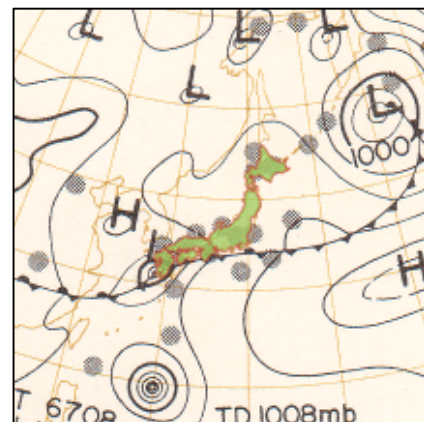
本インタビュー集は、今回の取組を通して伺うことのできた貴重な体験や教訓を引き続き土砂災害の減災に係る関係機関職員はもとより、土砂災害を経験したことの無い皆さん、さらには後世にも伝えていきたいという思いで作成したものです。

国土交通省近畿地方整備局
六甲砂防事務所

昭和42年六甲山系豪雨災害の概要

■ 記録的な降雨をもたらした梅雨前線と温帯低気圧

本州の南岸に停滞していた梅雨前線に、台風7号より変わった熱帯低気圧から暖湿気流が流れ込み、北からは冷たく乾いた空気が流れ込んで前線の活動が非常に活発となりました。7月8日には、北部九州から京阪神地域に至る沿岸沿いを中心に雷を伴う集中豪雨が発生。9日には熱帯低気圧から変わった温帯低気圧が通過したことで、さらに強い雨となり、神戸では1時間降水量75.8mm、1日の最大降水量319.4mmを観測しました。この最大日雨量は現在まで、気象庁の観測点：神戸における観測史上最大の記録です。



昭和42年7月9日の天気図
(出典:気象庁HP)

■ 六甲山麓の被害

六甲山系を水源とする生田川・湊川など中小河川がはん濫し、大量の土砂・流木が市街地に流れ込むとともに、多数の箇所ですり崩壊が発生。神戸市中央区、長田区、須磨区などの山際に広がった住宅地に被害が集中しました。特に生田川上流の中央区市ヶ原（当時：葺合区市ヶ原）では、世継山が大きく崩壊し、市ヶ原の集落を埋め尽くし、21名が死亡する大惨事となりました。

この災害における兵庫県内における死者・行方不明者は98名、被害家屋は約59,000戸の大災害となりました。

この災害における兵庫県内における死者・行方不明者は98名、被害家屋は約59,000戸の大災害となりました。



市ヶ原で発生した大規模崩壊(神戸市中央区市ヶ原)



JR神戸駅付近にまで流出した
流木・土砂(神戸市中央区)

■ 被害軽減に寄与した砂防事業

昭和13年阪神大水害の被害を受け、神戸市に内務省六甲砂防事務所が開設され、国による河川改修と砂防事業が始まりました。昭和26年に河川改修を兵庫県に移管した後は、砂防堰堤の整備等砂防事業が進められています。



昭和13年阪神大水害時の住吉川流域の被害
(阪急線より下流側を望む)

住吉川(神戸市東灘区)には、昭和13年阪神大水害の激甚な被害の教訓を後世に伝える『流石の碑』も設置されています。その上流には、昭和32年に五助砂防堰堤が完成しました。昭和42年7月豪雨の際、住吉川上流でも多数の崩壊が発生し、土砂が流れ込みましたが、五助砂防堰堤が約12万 m^3 もの土砂を捕捉したため、下流域の被害は阪神大水害と比較して大幅に軽減されました。

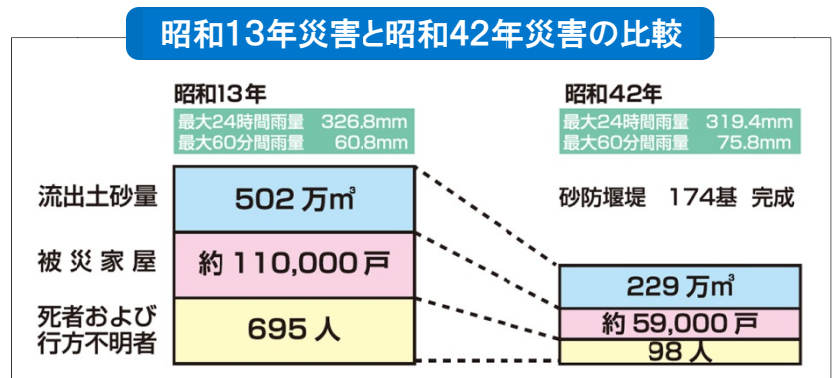


流石の碑(神戸市東灘区住吉山手 住吉学園内)

昭和42年7月豪雨災害時大量の土砂を止めた五助砂防堰堤

完成後(昭和32年)	昭和42年7月豪雨による災害後	
 <p>上流側から堰堤を望む</p>	 <p>堰堤から上流側を望む</p>	 <p>上流側より堰堤を望む</p>

昭和42年7月豪雨による災害時には、住吉川など六甲山系を水源とする河川の中上流域には174基の砂防堰堤が設置されていました。これにより市街地に流れ出す土砂の量は、昭和13年阪神大水害と比較して大幅に減少し、被害が抑制されたといえます。



目次

【須磨区】

浅居 秀寛さん	6
西川 昌一さん	8

【長田区】

中塚 富美子さん	10
----------	----

【兵庫区】

川上 岩雄さん	12
---------	----

【中央区】

濱野 勲さん	14
山本 雅幸さん	16

【灘区】

窪田 義弘さん、北浦 督通さん	18
-----------------	----

【東灘区】

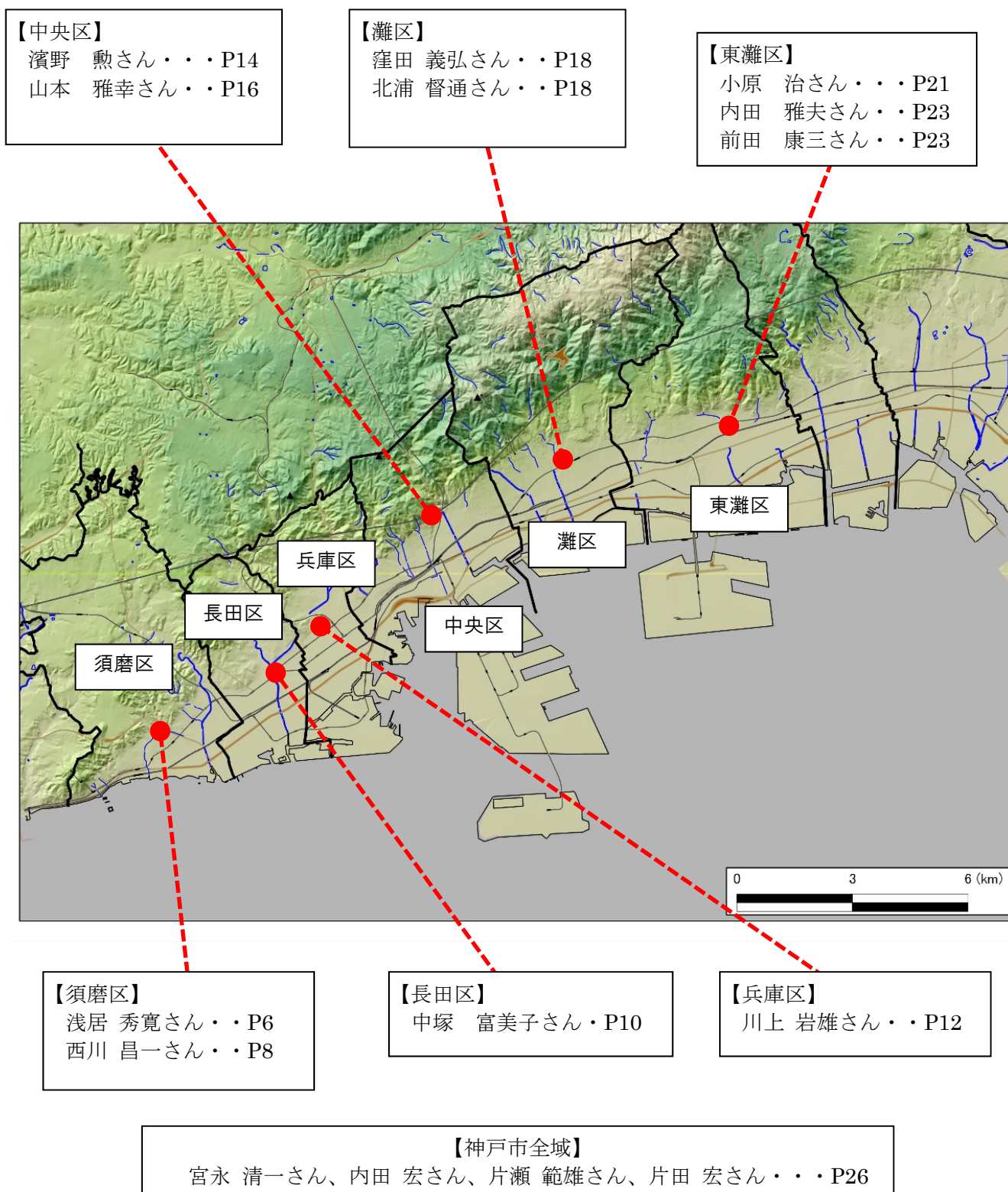
小原 治さん	21
内田 雅夫さん、前田 康三さん	23

【神戸市全域】

宮永 清一さん、内田 宏さん、片瀬 範雄さん、片田 宏さん	26
-------------------------------	----

昭和42年六甲山系豪雨災害 体験者マップ

※伺えた状況を体験された概略位置を示したもので、居住地・生活拠点とは異なります。





まずは自分の暮らしている場所の リスクをよく知ること

浅居 秀寛さん (81歳)
昭和42年災害時 兵庫県庁勤務

ヒアリング日：平成29年5月17日 場所：六甲砂防事務所

昭和42年災害が発生した当時は31歳でした。入庁してしばらくは京都から2時間半かけて通っていたんですが、それでは体がもたないということで、山陽電鉄の東須磨駅の近くにアパートを借りて住み始めたばかりだったんです。私事ですが、ちょうど2人目の子供が生まれて、京都から母が来ていました。梅雨の末期で梅雨前線が停滞していたところに台風7号が接近して、7日から雨が降り始めました。9日日曜日の午前中には、小康状態になって終息するかな・・とも思っていました。ところが午後1時くらいに雨脚が強くなり、午後3時ごろからはバケツをひっくり返したような雨とよく言われますが、さらに水の塊をドーンと投げつけたような大雨になりました。神戸はよく雨が降るね、普通の降り方じゃないと母と話してはいましたが、そんな大きな災害になるとはまだ思っていなかったですね。午後4時くらいから外が騒がしくなったんです。何事だろうと家の表に出たら、前の坂道を水がダダッと流れていた。そこで私もあわてて近所の人たちと一緒に土嚢を積んだり、町内のお手伝いをしたわけです。後でわかったことですが、急傾斜事業のきっかけとなった上細沢地区のがけ崩れの土砂が道路に流れだしてきていたということです。



神戸市須磨区上細沢地区で発生したがけ崩れの状況

アパートには電話もテレビもなく、周辺の状況も事務所に電話を入れることもできなかった。この辺りでこんな状況では、他のところでも被害が出ているんじゃないかとは思っておりました。翌日県庁には山陽電鉄で行ったんですが、西宮の方に住んでおられた方は阪急が止まっていたので、通常なら40分くらいで来られるところを3~4時間かかったということでした。



災害発生後の現地視察に同行する浅居さん(右端)

しばらくは砂防課の仕事で谷の調査に走り回っていました。2人ペアでタクシーで行けるところまで行って、谷を登る。六甲は尾根越えが非常に難しいので、一つの谷の調査が終わると下まで降りて、タクシーで移動してまた別の谷に登っての繰り返しで非常に効率が悪かったです。

兵庫県庁内にも災害対策本部が立ち上がって、天王谷川の堰堤が大変なこと

になっているからとにかく見に行ってくれと依頼がきた。当時制服がなかったので、ワイシャツに汚い作業ズボン、麦わら帽子をかぶって行ったんですが、現地に行ったら警察やら30名くらいいたんです。最初は何者がきたのかわからなかったらしく、追い返されそうになった。それでせめて「兵庫県」と書いた腕章をつけるようにしました。

上細沢地区の崩壊現場に移動して

この坂と側溝を見てもらうとわかると思うんですが、家の裏手がすぐ山です。石ころ一個落ちてきても家に飛び込んでくるような地形は六甲山地の山麓独特だと思います。この42年災害の発生もあって、昭和44年の7月に「急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律」が制定されて、急傾斜地崩壊対策が行われることになって、六甲山麓でもたくさんの箇所で工事が進められることになりました。

石ころ一個でもそこに住宅地が密集していれば、被害になる。都市の場合、小さな崩壊が及ぼす影響も非常に大きなものがある、普通、砂防事業が行われている中山間地とは別に考える必要がある、ということで「急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律」と併せて「都市砂防」という考え方も、この42年災害が大きなきっかけの一つとなって根付いていったと考えています。

あの災害から50年という年月が流れました。少なくともこの20年、30年大きな雨がなかったので、ここは大変景色のいい、安心な場所と思われがちですよ。それが一番危ない。だから、私みたいな生き証人というんですか、「過去には、こういうことがあったんですよ！」ということ発信するとともに、「災害後に国や県が対策工事をしてきた。わしももう安心だ！」とは絶対に思わないようにしてもらわなくてはならない。なぜなら、山がなくなったわけではなく、山裾を固めただけです。山からの土砂の供給は続いているんですよ。

1時間に90ミリ、100ミリという雨が当たり前になってきています。たまたま、この50年の間にそんな雨が降らなかっただけで、勾配が急で、小さな谷には川がない、わずかな側溝で水を流しているという状況は変わっていないから、土砂や水が道路を走っても仕方がないわけです。そういう中を避難するという事はかえって危険ですから、家の2階に上がって、山から遠い部屋にいるというような対応が取れるようになってもらいたい。

もう一つ、山を手入れする人が少なくなって山が荒れ、倒木などがたくさん山中にある状況があって、大雨などで一気に流れ出してくる可能性もある。いつもは側溝で流れて何も起きていないから大丈夫などと思わずに、避難するなら早めに避難するということが大切です。指定された避難場所だけが避難場所だと思わず、鉄筋でできた堅牢な建物が近くにあれば、そこに一時身を寄せようとか、いろいろと考えておくことが大切です。そのためにも、自分たちの暮らしている場所がどういう場所なのかを深く理解していただきたい。近くに山がある限り、100%安全ではないということを頭に置いておいていただきたいと思います。

急な坂道に並び立つ住宅





緑を育てて、山との共存を

西川 昌一さん (72歳)
当時 兵庫県砂防課

ヒアリング日：平成29年5月9日 場所：六甲砂防事務所

ちょうど県砂防課に入庁した年で、7月1日から学生を連れて赤穂市の崩壊調査に行っていました。10日の早朝、宿泊していた赤穂の公民館に土木事務所の主任さんが「神戸が災害やから直ぐに県庁に帰れ！」って駆けつけてくれたのです。その時はそんな大きな災害だとは思ってもみなかったもので、「分かりました。ちょっと帰りますけど、また来ます。」って気楽に答えて、ひどく叱られた記憶があります。なので、その時の雨の降り方は知らなくて、神戸に戻ってきたら大変なことになっていた。それからは現地調査だとか災害資料づくりに明け暮れる毎日でした。余談ですが、当時はコピー機がない時代で、広報用に被災箇所を地図に赤鉛筆でマーキングするのも手作業で何十枚と書き込みました。

昭和42年豪雨災害の大きな被害は市ヶ原の崩壊と宇治川の水害です。住吉川、都賀川、生田川などの大きな河川は、それまでに六甲砂防事務所が谷筋に砂防ダムなどをかなり整備していたので、ほとんど氾濫していない。治水的な被害は宇治川だけだったように思います。宇治川がなぜあんなに被害が大きくなったのかというと、流木が暗渠を塞いでしまったため水が溢れ出た。大変だったのは崖崩れ。山麓斜面がいたるところで崩れて住宅が土砂に押しつぶされているのがあちこちで見受けられた。犠牲者の半分以上が崖崩れで亡くなっている。昭和30年代の半ばごろから進んだ宅地開発で、それまで人が住んでいなかったところにも住むようになっていた。

昭和36年の災害で当時まだ造成中だった六甲ハイツが崩れて犠牲者が出た。それで宅地造成等規制法ができた。この42年の災害で急傾斜地法が制定されるようになった。神戸市は砂防対策への取り組みの先進地なのです。

最近の雨の降り方は変わりましたね。今では時間100mmの雨も珍しくはないのですが、以前は考えられなかった。昭和の最後の頃、三木で道路パトロールに出ている時に「西宮で100mmを超える雨が降っている」って無線が入ったのですが、何かの間違いじゃないかと話していたくらいです。近年、連続して局地的に豪雨が襲う線状降水帯が頻繁に起こっていますが、42年災害もその現象だったのじゃないかな。

被災地で話を聞いてみると2種類あるのですね。「こんなことは初めてだ」というのと、「昔もあった」というのと。そして、「今まで崩れてないから大丈夫だ」とか、「一度崩れているからもう崩れることはないだろう」と思ってしまう。言いたいことは、これまで災害を受けたことのないところでは、今まで経験したことのない雨が降ったら何か起こると思って避難することを考えないといけないし、過去にあったところでは、昔の人の話をよく聞いて、危ないところは危ないということで、雨の降り方が異常だったらやっぱり避難する。そのどちらも意識して欲しいです。危ないときに危ない場所にはないのが最も大切な対策の一つなので、自分で情報をしっかり取りに行き行動できるようにして欲しいですね。神戸の人は他の地域に比べたら土砂災害への関心は高いですが、それでも広報活動は今後も地道に続けた方がいい。

今危ないと感じているのは、六甲山です。六甲山は30年周期の災害でそれなりの整備も進んでいるので大丈夫だと思っていましたが、阪神・淡路大震災でどれくらい山体がゆるんでいるかわからなくなりました。それに地震以降きつい雨が降っていないでしょ。神戸市民にお願いしたいのは、地震で山がどうなっているのかも含めて、緑の力を借りるということで山と共存していくということ。六甲砂防事務所が六甲山麓の小学校で行っている「どんぐり育成プログラム」は最高の取り組みですね。それに参加した子供たちの1割でも砂防という言葉を知ってくれるだけでも違ってくると思います。阪神・淡路大震災を契機にはじまったグリーンベルト整備事業を大事に育てて欲しいとも思いますね。



昭和42年災害で最大の被害を出した市ヶ原の大規模崩壊(神戸市中央区市ヶ原)



身近で起こった山崩れの怖さを伝えて ～長田区明泉寺の山崩れ～

中塚 富美子さん（74歳）
主婦

ヒアリング日：平成29年3月7日 場所：中塚さんご自宅

当時は、滋賀から嫁いできてまだ2年目くらいで、このあたりのこともよくわかっていなかったです。家は急傾斜面にあって、主人と両親と生まれたばかりの赤ちゃんと、主人の弟の6人で住んでいました。家の北側にある窪地には3つの牧場がありました。

当日家にいたのは、私と赤ちゃん、弟の3人だったんです。3日降り続いた雨で坂下の長田商店街は腰あたりまで水につかかっていて、交通も遮断されていたものですから大阪にいた主人も、両親も帰って来られなかったんです。それで怖くて崖から遠い方にいたんですけど、ものすごい雨の中、犬がワンワン、ワンワン、牛がモーモー、モーモーとちょっと異常に騒ぎだしたんです。

「なんでやろね」って話をしていたら、ゴ、ゴ、ゴ、ゴ、ゴォーっと地鳴りがしてきて、そしてズンッときました。窓から見てみたら、真っ暗でしたけど土埃がすごくて、弟が「崖崩れやないか？」ということで、すぐに119番したんですが、消防もすぐには来られなかった。夜の間はどうしたらいいかわからず、赤ちゃんを抱いてただウロウロしていたのを覚えています。朝になってから牧場が土砂に埋まっているのを確認しました。怖かったですよ。

自宅は被害はなかったですが、崖下の牧場では救助隊の方が来て、流れ出した土砂をかき出して埋もれた人や牛などを助け出していました。買ったばかりのカメラでとにかくシャッターを切りました。結局このがけ崩れで5名もの方がお亡くなりになりました。がけ崩れ当日は、自宅前の坂道は川のように水が流れていたそうで、その下の川沿いの道や長田商店街が、いろんなものが流れてきてひどい状況で、主人が翌日戻ってきてくれたんですが、苦労して登ってきたんだと思います。

崖の復旧はすぐに瓦礫を処理して、法面の工事も1、2年でやってもらいました。それでも牧場はやめてしまって、その後はゴミ収集車の保管場所に使われていました。家が建ったのはしばらく経ってからですね。

明泉寺地区のなかでも、この辺りは道の傾斜がきついので、慌てて動かないのが、一番の対応策だと思います。名倉小学校が避難所なのですが、そこに行くのに、前の坂道は側溝とか整備してくれてますけど、それでも川のように水が流れるのは年に何回もありますし、谷があったり階段もあるし、橋も渡れる状況かどうかわからない。それに、このあたりは古くから住んでいる人が多くてみんな高齢になっているので、避難所までいけないねって話してます。どうしても避難しなければいけなくなったら、そこのお寺や公園に一旦集まって、集団で行こうということにな



中塚さんが翌日撮影された
自宅裏の斜面崩壊

ってます。

阪神・淡路大震災の後に整備された防災コミュニティの活動で、自治会の防災訓練の他に学校の防災訓練にも参加しています。昭和42年災害のときは、市ヶ原の崩落ばかりニュースで大きく取り上げられて、「うちともひどかったんやでえ」と思っていました。その当時の資料は、この辺りのものはあまりないです。それで私の撮った写真を学校に持っていったり、経験者の話が聞きたいと先生に頼まれたりします。私も実際に経験するまで崖が崩れるなんて思ってもいなかったの、身近でこんな災害があったってしっかりと伝えていけたらと思っています。



がけ崩れで埋もれた方の救出作業(神戸市長田区明泉寺)



自治会の活動をとおして防災意識を共有化

川上 岩雄さん（85歳）

当時 NTT 須磨局勤務 前 東里山自治会長

ヒアリング日：平成29年4月19日 場所：東里山自治会センター

当時、NTTの須磨電話局に勤めていました。電話局は宿直があつて、昭和42年豪雨災害の日は宿直あけで、帰ってきたら家内がいないんです。まだ土砂降りでどこに行ったのかなって探していたら、婦人部で炊き出しをやっているということでした。崖のすぐ手前にあるうぐいす荘というアパートがかけ崩れでやられていて大騒ぎになったそうで、家内たちは、その被災者や救援隊のためにアパートの空き部屋を借りて炊き出しをやっていた。台所は一番奥の崖側にあつたんです。そこに再び土砂が崩れてきて炊き出しに協力していた近所の人たちも生き埋めになってしまいました。家内に聞いた話ですが、匂いだとかの前触れは何も気付かなかつたようです。いきなりドサッと崩れきた。ただ、うちの家内も含めてあとから埋まった人は助け出されてケガだけで済んだのですが、最初に起きた崩壊で父子が生き埋めになり、子供は助け出されたのですが、お父さんが亡くなっています。消防に聞いても記録がほとんどないです。僕も翌日見に行きましたが、写真を撮るのが好きなのにも関わらず、当事者だと写真を撮っている余裕なんてなかつたですね。

自宅は大きな被害はなかつたです。昭和39年にここに土地を買いに来たときは段々畑の町で、40年に家を建てて当時5歳の長男と3人で引っ越してきたばかりでした。今は埋め立てて家が建っていますが、大きな池があつてそこが決壊するんじゃないかとひやひやしていましたが、42年の時は大丈夫でした。その後の47年の大雨の時に水が溢れてきて道が川のようになった。家は側溝があるので、その時も被害はなかつたですね。子供たちは魚が流れてきたというので、喜んでタモを探してたくらいです。

この里山地区というところは、周囲を山に囲まれていて、いつ土砂災害が起きても不思議ではないというところなんです。危なくないようにしてくれて県に陳情に行ったり、嘆願書を提出するなど交渉して、それからしばらく経って阪神・淡路大震災のあと、平成8年にやっと斜面对策工事が始まった。完成したのは12年でした。このあたりは交通の便もよく、駅から近いので昔は会社の寮など文化住宅がいっぱいあつたんですが、震災やらで潰れて今は新しい戸建てが増えました。だから、当時を知っている古い人は数が少ない。裏山が対策してあつて安心だと思っている。それで、先ほどの埋め立てた池の話も含めて、昔はこんな災害があつたと自治会の活動のうちに話をしています。



里山町（神戸市兵庫区）
がけ崩れ、死者1人

（神戸市提供資料）



川上さんには、がけ崩れが発生した現場を案内していただきました

<概略図>





地域住民と自治体とがコミュニケーションし、 情報共有してきちんと対策を取る

濱野 勲さん（75歳）

当時 レストラン経営

ヒアリング日：平成29年3月6日 場所：花隈自治会館

当時、大倉山の神戸医師会館でレストランを経営しておりました。その日は、学会があって、先生が300名くらい集まっていたんです。学会のあと皆さんがお食事されるというので、それなりの用意はしておったんですが、朝から降っていた雨が、お昼ごろには経験したことのないような、それこそバケツをぶちまけたような雨になって皆さん外に食事に出られなくなって全員が殺到したんです。宇治川が氾濫してひどいことになってるってことは聞いたんですけど、レストランから離れられなかった。だから現場に遭遇したわけではないんです。今なら自治会長とかしているの、周辺を見回りに行くだろうけど、当時は商売のことしか考えていなかった。

ただ、後からですけど、宇治川商店街の南端、高架に出る前の角にあった3階か4階建ての薬局のビルが傾いていたのを現認しました。水害でビルが傾いたのは珍しくて驚きました。



宇治川商店街の傾いたビル(神戸市中央区山手通)

当時は宇治川の水門がちゃんとできていなかったの、上から流れてきたのがつまって何度か氾濫していたんです。昭和13年のときも山の上の牧場から牛が流れてきたなんてことを聞いていました。それからやり直したんやと思います上にも砂防ダムとかできてますよね。

自宅は花隈にありまして、ここは坂も急で水が流れていくので被害はありませんでした。余談になりますが活断層もこの下はきれいで大震災の時もたいした被害はなかったんです。昔、花隈城ってのがあったんですが、昔の人は地形をよく知っていましたよね。

昨今のゲリラ豪雨については、昔も兵庫区の方は雨が降っていても、中央区は降っていないことがよくありましたが、雨の降り方が極端になってますよね。被害に遭ったときに身を守る術を皆が知らないとかかん。そのためには、情報を発信していかないといけないと思います。知らないとか危険なのか、危険じゃないのかの判断ができない。人任せにしているのはダメなんです、

自分で気づいて行動しないと。そのためにもしっかり情報発信して知ってもらわないと。それこそ「備えあれば憂いなし」ということですよ。

地域住民と行政とがきちんとコミュニケーションをとって、必要な情報を交換して、こういう場合はどうするとかきちんと対策をたてていないといけない。役場の人は現場で一所懸命働いているけど、それを周りの人は知らない。実際の体験談や被災の写真を見なかったら全然頭には入らないでしょ。情報発信は大事ですね。

特に中央区はタワーマンションが増えて、他所から何千何百人って入ってくる。若い世代が中心だが、ドーナツ化で一旦郊外に出た人が高齢になって通院とか買い物とかに困って、戻ってきてマンションに住む人も多いです。そういった人たちは、なかなかマンションから出てきてくれない。マンションの管理組合で防災とかやっちはいるんですが、災害にあったときは外に出て避難所に行かないといけない場合もあるし、ゴミや交通など地域に関わって行政との窓口になっているのが自治会なので、その大切さをわかって欲しい、地域の自治会とつながって欲しいと頑張っているんです。消防が防災訓練とか避難所を作ったりいろいろやっていますけど、それもどこに何があるか、いざという時にどういう行動をしたらいいのかきちんと伝えていかないとと思っています。



水の力は恐ろしい

山本 雅幸さん（67歳）
神戸市中央区山手通（宇治川商店街）在住

ヒアリング日：平成29年5月24日 場所：山本さんご自宅

当時高校生で、日曜日でしたけど何かで学校に行って午後に自宅に帰ってきましたが、帰ってくる時にはもうかなり雨脚が強くなっていました。宇治川商店街は少し強い雨が降ると、水が道路を流れて店の中に入ってくるようなことが結構ありましたので、最初はそんなに慌てていなかったんです。でも、しばらくすると水がバァーって出てきだして、これは危ないなあと思って、商品を上にあげる、冷蔵庫をちょっとでも高いところへ上げるとかして、親父は車をかわしに行ったんですけども、水で動かなくなっていました。物をちょっとでも高いところへ上げていたんですが、人の方が大事なので上へ上がっとけということで上へあがって、2階から窓越しに水の様子を見とくぐらいしかできなかったですね。

夜遅くなってからは、水が上がってきて向かいのアーケードの上まできて、それが引いてからも大分いろんなものが流れてきていましたね。商店街ですから、いろいろな店の中の商品がみんな流れ出して、ほんとにいろんなものが流れてきました。

すごいな、こんなに水が出るもんやなあと思いました。こんなに出たのは初めてやなあ。水の被害は毎年出ていましたが、出て膝くらいかなあ、それでも毎年一回か二回くらいは出ていました。昭和42年の水害以降は、いつも目詰まりしていた暗渠の工事が一気に進んで、それが完成してからは水の被害というのは一切出ていないです。

水が引いてからも泥がものすごく積もってました。泥をどけるのにホンマひと苦労しましたね。水だけなら引いたらすぐ無くなるんですけど、泥が入ってきてましたからね。その泥の除去ということで皆大変でした。商品なんか皆ダメになりました。泥を除去するのに一ヶ月くらいかかりました。水が大分無くなって



宇治川商店街を流れ下る濁流（神戸市中央区山手通）



大量の土砂と流木が商店街に流れ込んだ（神戸市中央区山手通）

からもマンホールなんか蓋が開いたままでしたから、変に歩いたら危ないということで、歩くこともあまりできなかったですね。

倒壊はなかったですが、ビルが傾いたというのは一軒ありましたね。うちの店から神戸駅に向かう途中の信号のちょっと北側のところですけど。新聞にもよく載ってました。地震でもないのに水だけでビルが傾くんやなあ、水の力はすごいなあと思ってました。

災害の備えは、今はもうだいたい津波ばっかしです。東南海地震の津波、あの対策っていうんですか、その対策は毎年一生懸命地域でやっています。神戸市でここまで熱心にやっているのはここぐらいではないかというくらい一生懸命やっています。最大で4mくらいの津波がくるのではないかということで、ブルーシートを4mまで上げて、こういう風にくるのかというようなシミュレーションを消防署と共にやっています。避難経路とかそういうものを想定して、聾啞の人とか目の悪い方の避難支援というのもやっています。また、それが終わったら炊き出し訓練などもやっています。

災害復旧に携わる地元の建設業者育成を



窪田 義弘さん (71 歳)
当時：学生 建設業



北浦 督通さん (70 歳)
当時：学生 建設業

ヒアリング日：平成 29 年 6 月 13 日 場所：神戸市役所

(北浦) 当時ちょうど二十歳で大学2年でした。夏休みで神戸に帰省していましたので、夏休み半分くらいは現場に行ってみると父に言われて現場に出始めた頃だったと思います。当日は雨で作業は休みだということで、友人のところに出かけていたんですが、帰宅が困難くらい水が出ていました。実家は兵庫の湊町にあつて、新開地の近所だったんですが、聚楽館あたりも歩きづらいぐらいの水嵩になっていたのを覚えています。その日まで数日間雨が降り続いていて、最終的に大きな雨が降ってその降雨量も含めて一気に土砂災害にいたったと思います。

翌日から現場に手伝いに行ったんですが、まだ学生でしたのでどういう形で進めるとかの作業の全容はわからなくて、会社が指示を受けた作業のなかで交通整理なんてこともやっていました。当時はまだ職業としての交通整理員が整備されてい wasn't でしたから、社員や協力会社の人間がやっていた。災害復旧のトラックが旗をたてて来た時には、信号に関わらず優先的に通していた記憶があります。

主な作業は土砂の除去であつたり、地元のお手伝いでした。鮮明に覚えているのが、宇治川のあの広い商店街がまったくの川になって流木や土砂が流れていたのと、天王谷川で土砂崩れがあつて、7~8名が流された。中でも特に覚えているのが、タクシーが乗客を乗せたまま土砂に呑み込まれてしまったのを、自衛隊が金属探知機で土砂の上を探していたことですね。

作業は朝の8時から夕方6時までだったのですが、商店街とかに手伝いに行った時は作業が終わりがけになると、ジュースとかを差し入れに来てくれるんです。手提げ金庫が流されたのをなんとか見つけてくれと頼まれてましてね。作業時間が終わったからといっても帰りづらいような状況だった。私はお盆過ぎくらいまでしかお手伝いをしていないので、ある程度の復旧までは見ていません。

(窪田) ぼくもまだ学生で、夏休みでしたから前の晩から三ノ宮で遊んでいた。雨がひどくなってきて、その人にもう帰りやって言われて表に出たら電車が止まっておつたんです。実家は塩屋でしたから三ノ宮から歩いて帰った。その道中で、生田川などが溢れて流木



様々な人々の協力で夥しい土砂を除去する
(神戸市中央区 宇治川商店街)〈神戸新聞社〉

があったのを記憶しています。当時実家は山陽電鉄に出入りさせてもらっていた関係で、須磨浦公園駅の近くで大きな土砂崩れがあって、2、3日で電車を通さないといかんということで、家に帰ったらすぐに手伝いに行けというので行きました。その時ちょうど重機の免許をもっていましたので、重機に乗って、疲れたら交代して現場で仮眠をとる。とにかく早く復旧しないと行けないということで、24時間体制で、線路に3~4m積もっていた土砂を、国鉄や道路との間に落とせと。僕が現場に行ったのはそこだけで、後は三ノ宮から歩いて通った際に見たくらいです。



災害発生直前の三ノ宮繁華街(7月9日午後9時半ごろ)
〈神戸市〉

自宅の周辺は、塩屋谷川が溢れて対岸は水につかっていたんですが、うちには被害がなかった。その後放水路を抜いているので、以降は水害はなくなりました。ちょうど今、50年ぶりになりますが、作業した現場の法面の工事をやっています。

(北浦) 本社の1階は床上浸水したくらいです。あの地区は少し大雨が降ると、いつも会社の前の道路が10cmくらい冠水していましたから、当時は排水対策がされていなかったんでしょう。その後整備されたので、ここ何年かはありません。

災害当時の資料が社屋地下の保管室にあったんですが、震災の時にその社屋が倒壊しまして、全部なくなってしまいました。

(北浦) 雨の降り方と言え、昔と厳密に比べてみたわけではないですけど、灘区でなんともなかったのに兵庫区にきたらひどい雨だったということはあります。下水道とかインフラの仕事を中心にやらせてもらっていますが、自分の頭の上は何ともないのに、急に水がくることがある。神戸は山と海が近いですから、そういうゲリラ豪雨が山や山裾で降った場合に土砂災害に遭う可能性は、他の平野にある都市に比べたらダントツに高いと思います。東西に長い神戸のどこでもそうです。

私が今住んでいるところは、見た感じでは土石流がくるとは感じられない場所なんですが、ハザードマップを見ると警戒区域に入っている。災害復旧に携わった経験のある我々でもそういうことですから、一般の方からすればまさか自分の住んでいる場所がそういう地域だろうとは思いません。そういうリスクがあるということを地域の皆さんに把握してもらうことが必要だと思います。

(窪田) 今の神戸の雨水幹線の設定が時間雨量50mmなんです。都賀川の時もそうでしたが、最近では50mmでは耐え切れない。災害の度に同じ話が繰り返されてばかりで、なかなか対処できないのが現状。雨水幹線も最近の雨量に対応できる大きさにできるのかというと難しい、造成地で調整地を造っても10年、20年経つともう必要ないというわけで潰してしまう所も結構多い。ということからすると、住民には「何をおいても早く避難して

ください。」っていうのが先決だろうと思う。

ハザードマップで指定されていないから安心ともいっておられない。指定箇所だけで収まってくれるとは限らなくなってきた。六甲山系も木を植えて禿山でなくなって、土砂災害も一旦は減ったんでしょうけど、今度はなかなか木の手入れができなくて枯れて倒れたのが、流されてくる。42 災の後、宇治川の山手幹線の上(北)に造った調整池のような大きなのを造っていかないかん。

(窪田) 報道の話ですけど、どの新聞を見ても災害復旧で自衛隊が活躍していることは取り上げられているのに、建設会社がお手伝いしたことはどこにも載っていない。仕事やろとか言われて、とかく建設業はあまりよく言われぬ。これまでの水害や震災はこの辺りが中心で、いろんなところから応援にも来てくれるけど東南海地震みたいな大きなのがきたら、地元の企業でなんとかしないとイケないので、業務発注の方法も含めて地元業者の育成にも配慮願いたいですね。

(北浦) うちも土木中心の会社ですから、この50年間災害対策に関わってきました。震災の時、現場の作業員達も自分も被災して避難所生活を送っているのに、そこから作業現場に出てくる。初動の時は特に仕事を超えて必死に働いているんです。もう少し世間的に評価をしていただけたらと思います。



身近で起こった山崩れの怖さを伝えて

小原 治さん（84歳）
神戸市東灘区本山中町在住
コミュニティ副会長

ヒアリング日：平成29年6月27日 場所：東灘区岡本5丁目 禊(みそぎ)橋

防災福祉コミュニティとして、皆さんにどのようなリスクがあるか、そのためにどういうところに避難場所があるか、そこに防災器具が置いてあるか、といういわゆる防災マップというものをつくりました。それから万一事故や災害が起こった時のために、「おたすけガイド」というマニュアルをつくりまして、皆さま方の行くところ、なすところを心得ていただけるようなパンフレットを各戸に配布しております。本山地区にもいろんな年代層の方がおられます。大体4世代になるのですけれども、その人たち全員に集まってもらって、ここで災害が起こった時にはどこへ避難するんだよとか、小学生などは誰が手をつないで歩くんだよとか、中学生になったら親から助けられるのではなく、親を助けるんだよとか、小学生の手を引いて避難してやるだけの社会的な責任のある年になったんだよということを教えるための訓練も含めまして、年に2回、避難訓練、災害訓練をしております。

昭和13年のいわゆる谷崎潤一郎の細雪にも出てまいります阪神大水害、それと昭和42年に同じ山崩れの被害がこの辺で出ましたけれども、両方とも私は経験しました。昭和42年災害からも50年が経ちましたが、この辺の人達は出入りが多いですから、いろんな沢山の人達がおられるのですけれども、災害の時の状況は正確に伝えられていないし、言い伝えもそれほど多くはない。だから、多くの住民の方は、意外とこの辺の土地が何もない安全なところ、便利なところ、おしゃれなところとかたちで、安心しておられ過ぎる、ないしは安定した地域として油断があるのではないかと、そういう気がしてならないのです。

一方で、この土地にそういう災害が起こりましたから、この土地そのものの危険性を十分認識された方々のおかげで、やっと荒れていた裏山にもみなさんで1本1本、木を植えられたんです。また、溪流にも砂防堰堤が整備されました。

今、兵庫県全体で700を超える砂防堰堤があると聞いてますけれども、そういう形で、いろいろな努力をしてこられた、そのおかげで現在がある。だからこそ昭和42年の水害の時も、不幸な出来事もありましたけれども、よくあれで済んだなあというのが私の思うところなんです。いろんな人の思いもあるでしょうけれども、昭和13年以来の先人たちの努力があつてこそ、現在の安定した地域が保たれているということを、私はいつまでも忘れてはならないと考えています。

私は、災害は忘れなくてもやってくるというつもりで考えています。だからこそ、今まで木を1本1本植えるというような地道な努力をこの辺の人達はずっとやってきたし、また、国もそれを援助してくれました。それでこそ、今のような緑が茂る防災力の強い山に復活したわけです。これは人の手を借りなければできません。自然にできたわけでは決してない。皆さん方が損害や被害を踏まえて、地域の活性化、安定化を図ろうと努力してきた成果なんだと考えています。

我々が、直接面と向かって語りかけるしか手はないんです。だから私としても、いつでもこの訓練を通じまして、地域の人たちに、こういう訓練に対する自覚と参加、これを私はこれからもずっととなえ続けていかなければならないと思っています。



本山地区の皆さんによる防災マップづくり



若い世代も参加して行われる本山地区の避難訓練

歴史資料館のイベントで防災の展示を実施



内田 雅夫さん
(69歳)
住吉歴史資料館
事業推進委員



前田 康三さん
(65歳)
住吉歴史資料館
事務局

ヒアリング日：平成29年4月19日 場所：住吉歴史資料館

(内田) 私は、19歳、大学生でした。私が今住んでいる家は、当時祖父母が住んでいた家で、その裏山が崩れたんです。白鶴美術館のすぐ裏側で、山がギリギリまでせまっている場所ですから、今でしたら建築許可がおりないでしょうね。

当時私は、少し下の方に住んでいまして、夜中にすごい雨が降ってるなあって思っていたら、明け方に「山が崩れた」って知らせが入ったんですね。それで大変だったことで、両親に「お前見てこい」って言われて祖母宅まで上がっていったんです。10時頃でしたが、道を水が流れていて、道の脇には土砂が20cmくらいたまっていました。登っていくにつれて災害地独特の匂い、泥くさい匂いがしてたのを覚えています。なんとかたどり着いたら、祖母が台所の土間を一所懸命に拭いていました。当時水車用の水路が崖と祖母宅の間を流れていまして、崩れた土砂が塞き止める形になって水と土砂が家突き抜けたんです。うちは台所の土間に水が上がったくらいですんだのですが、ご近所では床上まで浸水したようです。家の前にあったコンクリートの壁にせき止められて水が溜まったので、削（はつ）って水を流したって聞きました。それ以降は大雨の時は住吉川からの取水口を止めてます。裏に防災のために家を建てられない避け地をつくったり、主に県の治山事業で法面对策をやってくれまして、それ以降は崩れていないです。

その時はそんなに大層な災害だなんて思っていなかったですが、その後市ヶ原の状況等が大々的に報道されて、一連の大災害やったんやって思った記憶があります。このあたりも亡くなった方はいらっしゃいます。東灘区で救助中の警察官が埋まって亡くなったとか、赤塚でお子さんが埋まってしまったのを神戸大学住吉寮の学生が遺体を掘り出したと聞いています。

(前田) 僕は高校1年生の時、夕方学校から帰ってきた時はまだそんなに降っていなかった。7時ごろから、バケツをひっくり返したような、それまでと全然違う降り方でした。ちょうど父親が町内会の役員をしまして、朝の3時ごろに大雨で山が崩れたから炊き出しをしてくれて連絡があって、母が大阪風の俵型のおむすびを作って、父は出かけて行きました。このあたりの町内会は災害に慣れているので、対応が早いんですよ。朝には雨はもう降ってなくて、普通に学校へ行ったと記憶しています。国鉄は動いてましたから。

(内田) 阪急は2週間ばかり不通になって、西灘駅（今の王子公園駅）で折り返してたかな。当時大学に入って、夏休みのアルバイトに春日野道駅にあった事務所に行くことになったのが行けなかったのでよく覚えています。アルバイト期間が2週間で最後にやっと復

旧しました。

あと、洪水で冠水した道路を歩いている人が、突然いなくなるというニュースがありました。マンホールの蓋が開いていて、吸い込まれたんです。蓋をあけた人は、少しでも早く水をぬきたかったのでしょうか。吸い込まれた方のご遺体は天神川で発見されたと。裁判にもなりまして、大変複雑な思いをしました。

昭和13年の時には、阪急の鉄橋のところがちょうど平地になっていて、そこに土砂がたまって左右に水があふれた。それから住吉川の上流に五助砂防堰堤ができて、昭和42年豪雨災害のときにはしっかり土砂を止めてくれた。住吉川の本流は五助が止めてくれたんですが、住吉台や赤塚の方は今では宅地造成されてますけど当時はまったくの山で、そこを水が流れてきて若宮神社のところに落ちるんですよ。そして最終的に深田池の方に流れていく。深田池は半分くらい土砂で埋まってしまって、当時高級料亭があってそこも被害にあった。深田池が決壊寸前になって放流したのが御影石町の床上浸水になったと聞いている。住吉川にもそれくらいの土砂が流れたのを、五助砂防堰堤がよくぞとめたって感じですね。

僕らの子供のころはまったくの山だったところが宅地造成が進んで、住吉台とか赤塚の造成地とか新しい人がほとんどで、災害のことはほとんど知らないでしょうね。

住吉歴史資料館で年に一度、小学校が2校、中学校が1校、生徒さんをお呼んでお茶会をしています。その時に災害の展示とかもやりました。昭和13年の災害の後に甲南学園の創立者であった平生鈇三郎さんのおっしゃった「常二備へヨ」をスローガンとして伝えています。この言葉は覚えやすいうえに、端的にすべてを言ってくれるすごい言葉でしょ。学校に石碑がありますから一度見に行ってもらいたいですね。人間はすぐに忘れてしまうので、石碑をみて常に思いだして欲しいです。



甲南大学1号館前の「常二備へヨ」の碑

位置概略図



昭和42年豪雨災害時、大量の土砂を捕捉した五助砂防堰



完成直後(昭和32年ごろ)
上流側より



昭和42年豪雨災害直後
上流側より

公共事業のあり方を見直す契機となった大災害



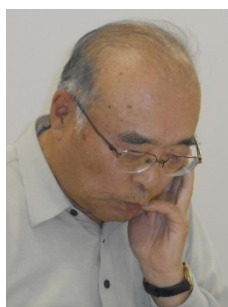
宮永 清一さん
(元神戸市職員)



内田 宏さん
(元神戸市職員)



片瀬 範雄さん
(元神戸市職員)



片田 宏さん
(元神戸市職員)

ヒアリング日：
平成29年5月17・23日
場所：神戸市役所

(宮永) 前日の土曜日、赤穂に行っていました。防災指令が出たということで早めに引き上げたんだけど、赤穂、明石のあたりと神戸では雨の降り方がかなり違って、明石に帰った私は神戸市内ほどの危機感を抱いていなかったと記憶しています。私は家に帰ってから、課長から「何しとんねん」って電話で怒られて慌てて出庁した。やはりところどころ車が通れなくて歩かないと行けない場所があって、タクシーを乗り継いで1時間くらいかかったかな。

私のセクションは都市計画でしたから災害対応の本筋ではないので、救出とかの出動はなかった。土木局防災課のサブですね。神戸市内を現地調査して、災害査定用の資料を作りました。

神戸市内を現地調査して強く感じたのは、川は付け替えしても、水は昔の地形どおりに流れるんだなあってことですね。生田川はまっすぐ付け替えられていたが、洪水は旧河川敷跡の道路(税関線)をずっと流れて市役所の前に流れてきた。湊川も長田区を横(東西)にもものすごく引っ張ったのが、まっすぐ下(南)に流れて新開地あたりが浸水した。

一般的に暗渠の入口は柵をしてあるが、その手前にもう一つ流木を止める手立てをしておかないといかんと思います。水は引いても、暗渠につまった流木はなかなか撤去できない。特にひどかったのは、宇治川の山手幹線の南側が暗渠になっているが、その入口のところに流木がひっかかって、つまってしまっただけで溢れた。我々には手に負えないということで、県にお願いして自衛隊を呼んでもらった。暗渠を爆破しようなんて案もでて、焦ったんですけど、結局は命綱をつけて地道に流木の撤去を続けた。それでやっと商店街の水がひいて、土砂の除去作業ができるようになった。

被害が大きくなった原因は、六甲山はだいたい花崗岩ですよ。その上に花崗岩が風化した真砂土が積もっている。真砂土は水に弱いので、雨でしばしば崩れる。破碎帯もあって沢がどっと崩れてそれが樹木と一緒に流れていく。土砂被害はだいたい山手幹線の上(北)で、その下(南)は水害だったと記憶しています。山際のところで、家のすぐ裏が山ってところがたくさんあって、そこもだいたい被害にあった。42年災害は、大量の土砂が市街地に流れ込みましてね、私たち職員だけでは到底、取り除くことができなかった。そこで建設業者にお願いして、重機を使って撤去作業をしましたね。この災害をきっかけに災害があったら、すぐに建設業界に支援をお願いできるよう、建築協力会や土

木協力会というのをつくった。市内の建設業者に災害の一報をいれると、各地域で即座に対応してくれるというシステムを作るきっかけにもなった災害です。

(片瀬) 防災指令が8日の土曜日、午後に出てました。私はまだ役所に入って2年目で、土木局の建設課にいましたので、日曜日は防災指令の待機で役所にいました。ビルの中にいたので、そんなにひどい雨が降っているとも感じなかった。1号指令だったので、数人が残っていました。日曜日の昼からかなり雨足が強まって、夕方4時ごろに真っ暗になりました。防災指令のレベルがあがって、多くの人はずぶれになって出勤してきました。その人たちに聞いた話ですが、宇治川の元町6丁目のところの高速鉄道の工事現場で、でっかい穴が開いていて、そこに宇治川の水がどっと流れ込んでいたと。そこに吸い込まれそうになりながら出勤してきたということでした。

(片田) 私は当時、都市計画局計画課にいました。当時、都市計画局は防災に対する体制に組み込まれていなかったこともあって、西宮の自宅にいました。そしたら、庶務課から電話がかかってきて、慌てて出勤しました。その時はまだ5~6人しか出庁していなかったですね。課の職員も防災指令が出たということで、出庁してきました。須磨浦公園のところかな、道路が冠水していて車が通れないと連絡が入ったのですが、車を乗り継いで夜の10時ごろなんとか出勤してきました。当日覚えているのは、訳も分からず呼び出されて、ただ右往左往していたということですね。

翌日、やっと落ち着いて、市街地部分、山から土砂がきて一般の宅地や道路がどんな被害になっているか調べると、災害査定があるから金額を出せということで、僕らは分担してどれだけ土砂がたまっているか測量して写真を撮って、そういった査定用の証拠を残して早く土砂を撤去できるようにしました。

測量していて覚えているのは、近所のおばちゃんが「はよ、土をどけて」って言うので、スコップを用意して、苦労してダンプに土をつんだんです。当時はダンプの荷台が高くて土を積むのも大変だったし、土嚢も今より格段に大きくて重かった。業者も重機を持っているところが少なく、重機は取り合いだったと思います。

(片瀬) わたしは、補助事業が継続できるかどうか、翌日から調査に入りました。国道428号のバイパス工事や42年3月に開通したばかりの六甲有料道路など調査に行きました。いろいろ見て思ったのですが、昔に造った道路はほとんど被害がなかった。昔の人はよく地形をわかっていたんだと思いました。その後は土木事務所に派遣されました。自治体は災害が発生したら速やかに国からの補助を確保するのも大きな務めです。苦労した災害復旧の経験を語り継いでいかないといけないとも思います。

(内田) 災害を知らない世代に言いたいことは、前にロープウェイに乗っていたときに砂防ダムを見て、たまたま乗っていたご婦人2人がコンクリートで環境破壊じゃないかと、まだ作るんですかとおっしゃるんですね。あれが神戸の街を守ってくれているんですよって説明しても通じない。残念な気がしました。

関西で若手の記者が「なまずの会」という会をつくって、年に何回か勉強会を開催しています。そこで、住吉川や砂防現場を案内したことがある。その時は五助砂防堰堤まで行かなかったが、また機会があれば住吉川ツアーなどをして、天井川の怖さとかいろいろ体験してもらって、それをマスコミで取り上げてもらえればと思います。

(宮永) 戦後、日本の公共事業は戦災復興のため、早く、たくさん施設整備することが要求されてきました。今考えると十分に耐久性などを考える余裕もなく、施設整備を進めた面は否めません。昔からある道路は災害後も機能したり、昭和13年阪神大水害の被害を受けて始まった砂防事業でつくられた砂防堰堤が機能を発揮して、かなりの土砂の市街地への流入を食い止めた。そういった教訓を受けて、公共事業も熟慮され、耐久性も踏まえて進められるようになってきたと思っています。



宇治川商店街の道路陥没(神戸市中央区山手通り)